

「多読 to 読書」プロジェクト2015

——英語多読学習を介した日本語読書習慣づくりの難しさと 敬和学園大学における応用の可能性——

荒 木 陽 子

はじめに

筆者は『人文社会科学研究所年報』No.14に掲載された『「多読 to 読書」プロジェクト2014——英語多読学習を介した日本語読書習慣作りに向けて——』において、2014-15年度にかけて北海道情報大学で実施した「多読 to 読書」プロジェクト初年度のあらましと、その進捗状況をまとめ、当時の問題点と課題を明らかにした⁽¹⁾。本稿では、同プロジェクト2年目の実施状況をまとめ、初年度に明らかになった問題点と課題がどのような形で帰結したのかを報告し、敬和学園大学の英語教育プログラムにおいて、同プロジェクトの結果を応用してゆく場合にはどのような点に配慮する必要があるのかを考察してみたい。

I. 「多読 to 読書」プロジェクト 2014 のあらまし

2015年度の報告に入る前に、参考のため前年度のプロジェクトのあらましを記したい。本プロジェクトの目的は、学生の将来を見据えて、英語多読学習を生涯学習につながるであろう母語である日本語の読書習慣の定着、強化に結びつけることであった。初年度はそのための英語多読学習の導入に力を入れ、その方策の一つとして、通常の英語多読学習用に開発された書籍に加えて、多くの学生が娯楽として親しむライトノベルに近い内容の英語で書かれたヤングアダルト文学やクロスオーバー文学を紹介し、それを読むことを奨励した。これはまた暗によりレベルの高い英語で書かれた書籍に触れることで、学生が翻訳に手を伸ばしていくことを期待したものであった。

本プロジェクトでは、英語学習を母語の読書習慣づくりに結び付けるべく、英語多読学習で読んだ書籍や関連する書籍を日本語でも読むことをすすめた。本プロジェクトの2014年度は、主として北海道情報大学2014年度入学生のうち、プレイスメント・テストの結果、初年次7レベル展開の必修科目「基礎英語」において最上級クラスに配属された経営情報学部、情報メディア学部、そして医療情報学部に所属する学生59名（うちアンケート回答者48名）を対象に実施した。2014年度のプロジェクトに対する学生の反応は、同年11月に実施されたアンケートの結果をもって測定された。アンケートの際には、プロジェクトに参加していない学生134名にコントロール・グループとして協力を乞い、比較対象とした。

2014年度のプロジェクトの結果は冒頭に言及した『多読 to 読書』プロジェクト2014』にまとめた。詳細は同論文を参照していただきたいが、実際に同年度多読学習用書籍以外の英語の書籍を手にとった学生は48名中17名(35%)、ヤングアダルト文学やクロスオーバー文学を手にとった学生は48名中12名(25%)、実際に読んだ学生は48名中6名(12.5%)と、まずまずの結果となった。その一方で、本プロジェクトが英語多読学習やヤングアダルト文学、クロスオーバー文学の導入に与える影響は非常に大きいことは、実験対象グループではほぼ9割の学生が英語多読学習、8割がヤングアダルト文学、クロスオーバー文学というジャンルの認知に至ったのに対して、コントロール・グループの学生のうち、それらを認知している学生は1割に満たず、実際にそれらを読んだことのある学生は134名中2名と、2%にも満たなかったというアンケートの結果が端的に示した。

また、本プロジェクトは当初学生が英語多読学習で読んだ本、ないしは関連の図書を日本語で読む形で、読書量を増加させることを想定していた。しかし、実際には対象グループ中で英語多読学習のために図書館に向かった学生の4分の1が、多読学習とは関係ないが自分に関心を持っている日本語書籍を借りていることがアンケートからわかり、それは想定外の「ついで読書」というルートでも、学生の読書量を増加させる可能性を示した。以下、本論部分では2014年に開始したプロジェクトが、実験最終年度の2015年にどのような展開を見せたのかをまとめていく。

II. 「多読 to 読書」プロジェクト2015の取り組み

1. 教室内におけるとりくみ

2015年度は、前年度に続き筆者の担当した、医療情報学部の2年次選択必修教科「実用英語」を受講した学生29名を研究対象とした。このうち、2015年12月に実施したアンケートに回答した学生は18名であり、11名は前年度の研究対象クラスには参加していない。つまり、前年度より継続して履修した学生は7名に過ぎない。また、2015年度については前年度に教室内で培われた読書習慣を、本プロジェクトの狙いである生涯教育へとつながる教室外での読書習慣につなげてゆくべく、授業内の多読学習は実施回数を減らし月に1度程度の実施として、主要な学習の場を教室外、特に図書館や家庭等の個人の時空に移行した。また、教室からの読書の場の移行をサポートするための方策として、次節以降に詳述するウェブサイトの作成や図書館で「多読 to 読書」キャンペーンを行った。

前述のとおり、2015年度の研究はサンプル数が少なく、本研究を一般化することは困難である。しかし、英語を専門としない大学1年～2年生を対象とする一般教養英語クラスにおいて英語多読学習を実施する際や、文系ではない学生に読書を促す際には、参考に

なり得る。また、応用を経れば、文系の学生への外国語・日本語による読書教育の導入にも参考となり得るケーススタディとしての意義はあると思われる。以下、2015年度の取り組みを紹介していく。

2. 学生サポート用ウェブサイトの作成



(写真1)

ト制作に無知な筆者でも簡単に作れること、PDF等のファイルを添付しやすいことなどを理由にジンドウ (Jimdo) を利用した⁽³⁾。また、同ウェブサイトには、本プロジェクトの概要、英語多読学習、ヤングアダルト文学やクロスオーバー文学に関する解説に加えて、学生が英語多読学習から母語である日本語の書籍の読書へ移行するのを促すために、前年度の学生の協力のもとで蓄積された読書記録を参考に、学生が楽しめそうなヤングアダルト文学、クロスオーバー文学作品のリスト、および同ジャンルの英語書籍とその日本語訳及び関連図書の北海道情報大学図書館における所蔵の有無を表記した「書籍対照表」を添付した (写真2)。そして、学生が読みたいと思った本に容易にアクセスすることを可能にするために、同ウェブサイトには、北海道情報大学の図書館のOPACのほか、近隣の大学の図書館を含む、北海道内の主要図書館のOPACへのリンクをもつ北海道情報大学図書館のホームページ・トップへのリンクも設けるなど工夫を凝らした⁽⁴⁾。ホームページ上の素敵な絵を含め、ウェブサイトの制作には当時北海道情報大学情報メディア学部の学生であった滝川智美さんの協力を得た。数年越しとなったが、この場を借りてお礼を申し上げたい。

プロジェクト2年目の大きな特徴は、プロジェクトに参加している学生の「多読 to 読書」への移行、および2年目に筆者の担当するクラスを受講しない学生の読書継続を補助するために、ウェブサイト「多読 to 読書プロジェクト」(写真1)を作成したことである⁽²⁾。ウェブサイトのプラットフォームには見栄えが良く無料サービスが充実していること、ウェブサイ



(写真2)

3. 北海道情報大学図書館における「多読 to 読書」キャンペーンの実施

2015年度は、ウェブサイトの製作・使用に加えて、前年度に北海道情報大学図書館に設置された、ささやかな英語多読学習用図書およびヤングアダルト文学、クロスオーバー文学本棚付近で、2015年夏から冬にかけて図書館職員の協力を得て「多読 to 読書」キャンペーンを展開した。キャンペーン中の取り組みの中心は、先に言及したウェブサイト上の書籍対照表に掲載された英語図書の日本語訳を図書館内から取りまとめ、特に学生の読書率が高かった書籍の邦訳を中心に、英語図書本棚のはす向かいの掲示板の前に、キャンペーン・ポスターとともに、展示用ワゴン3台にまとめて設置したことであろう。(写真2)のウェブページ情報の熊のキャラクターは、当初このキャンペーン・ポスターに登場したキャラクターである。また、(写真2)のウェブサイト上には、学生にどこに行けば翻訳が見つかるのかを示すため、当時使用していた展示用ワゴンの写真が掲載されている。

次章では、これらの方法をもって行われた「多読 to 読書」プロジェクト2015の成果をまとめていきたい。成果はプロジェクト参加学生29名を対象として2015年12月に実施されたアンケートをもって計測した。加えて、前年度から継続して、プロジェクトに参加した7名の学生については、2016年1月に行われた座談会形式のインタビューをもって、アンケートで発見された問題点——英語多読学習から日本語読書への移行が結局のところ上手く行われなかった——の背景をさぐる試みを行った。次章ではその結果をまとめていきたい。

III. 「多読 to 読書」プロジェクト2015の結果と発見

1. 2015年度アンケートの特性

筆者は2015年12月9日および11日に、筆者が担当した医療情報学部2年次選択必修教科「実用英語」(2クラス編成)を履修する学生を対象に「多読 to 読書」プロジェクトに関するアンケートを実施した。前述のとおり、全29名の履修者中18名のアンケート回答者のうち、7名が前年度から継続してプロジェクトに参加した学生である。アンケートの設問は、以下の表1に示すとおりである。アンケートは以下の通り18の問いからなる。

(表1) 2015年度アンケート設問

Q 0	★大学入学前に小、中、高で朝の読書があった。
Q 1	★昨年度(2014年度)基礎英語の担当が荒木だった。ここで「a) はい」を選択した学生はQ10へ進んでください。
Q 2	Q 1で「b) いいえ」を選択した学生にお尋ねします。多読学習という英語学習法を聞いたことがありますか?

Q 3	Q 1で「a) はい」を選択した学生にお尋ねします。多読学習について知ったのはいつですか？ また「d) 大学入学後」を選択した場合、どの教員のクラスで聞きましたか？
Q 4	ヤングアダルト文学（以下、YA 文学）やクロスオーバー文学という言葉聞いたことがありますか？
Q 5	Q 4で「a) はい」を選択した学生にお聞きします。いつ、どこでその言葉を聞きましたか？
Q 6	Q 2とQ 4の両方で「a) はい」を選択した学生にお尋ねします。英語のYA・クロスオーバー文学を手にしたことがありますか？
Q 7	Q 6で「a) はい」を選択した学生にお尋ねします。読んだ本の作品名と作家名、ないしはそのどちらかを教えてください。
Q 8	英語で読んだ本の翻訳、ないしは関連する日本語の図書を手に取ったり、読んだりしたことはありますか？
Q 9	★図書館5Fの多読図書コーナー付近にある「多読 to 読書」という棚に足を運んだことがありますか？
Q10	★昨年度荒木担当の基礎英語を履修した学生にお尋ねします。英語多読学習を自主的に継続していますか？
Q11	★Q10で「b) いいえ」を選択した学生にお尋ねします。多読学習をやめてしまった理由を教えてください。
Q12	★図書館5Fの多読図書コーナー付近にある「多読 to 読書」という棚に足を運んだことがありますか？
Q13	★Q10で「b) いいえ」を選択した学生にお尋ねします。今年は荒木の実用英語、職業英語等を履修していますか？
Q14	Q10で「a) はい」を選択した学生にお尋ねします。英語のYA文学やクロスオーバー文学を手に取りましたか？ 「a) はい」の場合、本のタイトルと作者名を教えてください。
Q15	★Q10で「a) はい」を選択した学生にお尋ねします。英語で読んだ本の翻訳、関連する日本語の図書を手に取りましたか？
Q16	★Q15で「a) はい」を選択した学生にお尋ねします。実際に手に取った日本語の書籍を読みましたか？ 本のタイトルと作家名を教えてください。
Q17	★英語多読学習のついでに、図書館で気になった本を借りた経験がありますか？

★は前年度のプロジェクトを反映して加えられた設問。

上のアンケートは、原則的に拙稿『多読 to 読書』プロジェクト2014』に掲載したアンケートと同様の設問であるが、プロジェクト1年目の結果を反映して、改定がなされている⁽⁵⁾。同論文冒頭で示唆したとおり、2015年時点で北海道の小中等教育機関の68%が朝読書を実施していることに鑑みて、学生の読書習慣の定着の在り方に影響を与えるであろう、プロジェクト開始以前の学生の読書習慣を問う設問(Q 0)を付け加えた⁽⁶⁾。さらに、プロジェクト継続参加の学生の2年目の変化を計測するために、彼らがQ 1以降、別の質問群(Q10-17)に進むようにアンケートを設計した。

また、前年度の研究が明らかにした、学生が英語多読学習をきっかけに図書館に足をむけ多読学習とは関係のない書籍を借りる傾向の継続調査を行うためQ17を⁽⁷⁾、さらに2015年度に図書館で行った「多読 to 読書キャンペーン」の一貫として設置された、翻訳図書ワゴンに足を運んだことがあるかを問う、Q 9およびQ12も付け加えた。次節で

は、特にプロジェクトに前年度から参加している学生の変化に注目しながら、2度目のアンケートをもって計測された、「多読 to 読書」プロジェクト 2015 の効果を明らかにしたい。

2. 2015 年度アンケートの結果とその考察

(1) 英語でヤングアダルト文学、クロスオーバー文学を手にとった学生の増加

アンケートの Q14 への回答によれば、2015 年度は、前年度に英語多読学習を導入された 7 名の学生のうち 3 名が英語のヤングアダルト文学、クロスオーバー文学を手にとった。1 年次全員必修であった「基礎英語」ではなく、2 年次生となっても選択必修教科である「実用英語」をあえて選んで参加した学生群であることも影響していると考えられる。ただ、導入された学生の 25% がそれを手にとったに過ぎなかった前年度に比べて、2 年目は、2 割弱多い 43% の学生が英語でヤングアダルト、クロスオーバー文学に少なくとも手を伸ばしたことになる。また、これらの学生が実際に手にとった本を読んだことは、個別インタビューで確認済みである。学生自身がどちらの枠にも入らないと考えた純文学、ウィリアム・シェイクスピア著『ハムレット』とサミュエル・ベケット著『ゴドーを待ちながら』を英語で読んだ学生 2 名も含めれば、実に約 71% 以上が多読学習の枠を超えて英語で読書をしたことになる。これは、2 年続けて学生にアピールを続けた影響であろう⁽⁸⁾。

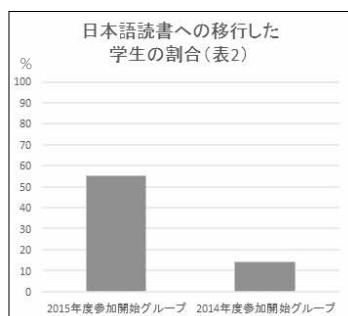
一方で、2015 年度からプロジェクトに途中参加した学生の反応も興味深い。Q 4、6 への回答からは、昨年度より授業内での多読学習時間を大きく減らして行った 2015 年度からプロジェクトに参加した学生 11 名のうち、ヤングアダルト、クロスオーバー文学というジャンルを認知し、実際に英語で書かれたそれらの文学を手にした学生は、一割にも満たないわずか 1 名 (9%) であったことがわかった。そして、興味深いことにこの学生 1 名は高校時代に国語教師ないしは英語教師にこのジャンルについて導入を受けたという。これは、25% が該当の作品を手にとった 2014 年のグループとは大きな差である。この差は、月に 1 度程度しか授業内で多読学習をしなかった 2015 年度において、ウェブサイトの利用を以ってしても、このジャンルの導入が上手くいっていないこと、そして聞きなれないジャンルの外国文学の導入に際しては、執拗に毎週授業内の時間を使って実際に語り掛けることが有効であることを如実に表すであろう。

このプロジェクト参加 1 年目の学生の結果を、プロジェクト参加 2 年目の学生群のそれと比較すると、1 年目の導入がしっかりなされていれば、2 年目は授業内の多読学習の時間を減らしても、前年度に提供された蓄積したヤングアダルト文学、クロスオーバー文学に関する情報を基に、引き続き同ジャンルへの関心を保ち、書籍を手にとってみる学生

が増えていく可能性があることがわかる。

(2) 英語図書から日本語訳、関連図書に移行した学生の割合

先に述べた通り、2015年度新規にプロジェクトに参加し、英語多読学習ならびにヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学の導入を初めて受けた学生は、ほとんど英語のヤングアダルト文学、クロスオーヴァー文学へ手を伸ばさなかった。一方で、アンケートQ8への回答から、11名中6名(約55%)が、英語図書から日本語の翻訳作品や関連図書へと移行したことがわかる。



(表2)が示すように、プロジェクト参加1年目のグループの読書傾向は、継続参加のグループのそれとは対照的な結果となった。というのは、後者は「学生は英語で手に取った作品や関連作品をより読みやすい日本語で読むであろう」という、筆者の仮説に反して、多読用テキストではない英語の書籍を手に取った学生の割合が1年目の約4分の1から7割以上に増えたからだ。一方で、Q15への回答の

通り、彼らの英語による読書は、日本語の翻訳作品や関連図書の読書にほとんど繋がらなかった(7名中1名、約14%)。

これは、すべての学生が「多読 to 読書」キャンペーンの翻訳ワゴンに行っているにもかかわらずの結果である(Q12)。アンケートを追って2016年1月20日および22日に行われたインタビューから、この結果を裏付ける発言が見出せる。学生たちは、アルバイトと勉学の両立のため時間がなく、一度英語で読んだものを、あえて日本語であらためて読む必要性を感じていないことを語っていた。このグループの学生が読んだ英語の作品には、クロスオーヴァー文学に含まれるJ.K.ローリングやマイケル・クライトンらの映画化された作品の原作に加えて、ウィリアム・シェイクスピア、サミュエル・ベケット、さらにはマーク・トウェインなどのいわゆる純文学作品がある⁽⁹⁾。彼らがいわゆる文学部の学生ではなく、医療情報学部の学生であることを考えると、この結果は興味深い。ただ、このようにインタビューでは回答しているにも関わらず、該当グループで唯一日本語訳を利用したのは、シェイクスピアの『ハムレット』を読んだ学生でもあることを考えると、原作が彼らの慣れ親しんだ現代英語とは異なる「わかりにくい」英語で書かれている場合には、内容を確認するために日本語訳に移行することがわかる。加えて、インタビューから、この学生に関してはグループで唯一、TOEIC対策として、明確に英語力を伸ばすために、翻訳を利用していたことが後にインタビューから分かった。彼は英語の文献と翻訳を対称して読むことで、自らの読めていない単語や表現を明らかにしながら、語彙力・英語読解

力を拡充しようとしていたのである。

プロジェクト参加2年目のグループのアンケート結果は、彼らの英語読者としての成長とともに、生涯教育へとつながる読書を増やすために、「母語」の読書に移行させる必要があると考えた筆者自身の「学生は日本語の方が読みやすい」という固定観念を浮き彫りにすることになった。この結果は、筆者に必ずしも母語による読書だけが、生涯学習へとつながっていくわけではないことを思い知らせてくれた。

また、プロジェクト2015に参加したふたつのグループが見せた日本語読書への移行率の大きな違いは、「英語で読む」という習慣が確立されていない段階で、授業、さらには図書館における「多読to読書キャンペーン」で、翻訳等を日本語で読むことを奨励されると、学生が「より読みやすい」日本語での読書にひかれて行く可能性を示したといえよう。Q9への回答によれば、このグループの学生11名のうち9名(約81%)が、「多読to読書」キャンペーンの翻訳ワゴンを訪れているが、2年目のグループも100%の学生が翻訳ワゴンを訪れているから、後者はワゴンに行っても翻訳にあまり手が伸びなかったことになる。従って、英語多読学習経路で、「母語による読書量のみを増やすこと」を目標とするならば、英語で読む習慣が定着する前に、日本語で読むオプションを学生に与えることがより効果的であるといえる。

ただ、本プロジェクトが目標とした、英語学習を介した生涯教育へとつながる読書習慣の土台作りは、必ずしも日本語による読書のみにつながっているわけではない。したがって、研究2年目の結果としては想定外であったが、英語で読み続けることを、否定する必要はない。

(3) 初中等教育機関での朝読書経験との関係、「ついで読書」経験者の割合

筆者は『多読to読書』プロジェクト2014で、本プロジェクトが大学入学以前に初中等教育機関で行われてきた「朝読書」の習慣を、大学生生活内で異なる言語で実践する機会を与えている可能性を示唆した⁽¹⁰⁾。そこでプロジェクト2015では、アンケート調査の項目Q0、および前年度からの継続参加者を対象としたインタビューの結果から、朝読書の経験を問い、研究対象とする学生の読書傾向との関連性の如何を探った。

アンケートから、2年間継続してプロジェクトに参加した学生7名のうち6名、初年度の学生のうち10名、つまり2015年度プロジェクト参加者の89%が大学入学以前に「朝読書」を経験していたことが分かった。2016年1月のインタビューの結果によれば、朝読書を経験していなかったプロジェクト2年目の学生1名に関しては「まず読書の習慣がなく、読む時間がない」と、日本語でも英語でも読書習慣がついているとは感じていなかったが、授業内では英語で『ジュラシック・パーク』を読んでいた。彼の例は授業内で読書時間を

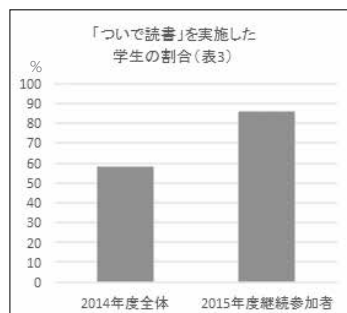
与えることにより、読書習慣のない学生を一時的にでも読書に向かわせることが可能であることを示すだろう。朝読書の経験を持つ学生のうち1名も類似する解答をしていた。

母数が非常に少ないため断言することは危険であるが、朝読書の習慣のない学生たち2名のうち1名は、読書習慣がないことを自認するにも関わらず、こうして英語多読学習用図書の枠を超えてヤングアダルト文学、クロスオーバー文学へと食指が動いたのであるから、16名中3名(19%)が英語のヤングアダルト文学やクロスオーバー文学に、純文学も含めると16名中5名(約31%)が進んだ朝読書の経験者のほうが、英語多読学習用図書のより幅広い分野の英語読書に向かいやすいという議論は成立しにくい。また、2年目のグループに限って言えば、朝読書未経験者の100%、朝読書経験者で6名中4名(約67%)が多読学習用以外の英語図書に進んだのであるから、このグループについても同様のことが言えるであろう。

さらに、参加1年目のグループからは朝読書未経験の学生で多読学習の枠を超えた英語の書籍に手を伸ばしたものがいなかったこと、また朝読書経験者に関しても1年目のグループを含めた英語読書移行率が約31%であるのに対して、2年目のグループに限って言えば、それが倍以上に跳ね上がることから、教育の場で行われる継続的な学生への働きかけには、効果があることを認めねばならない。

ただ、興味深いことに、プロジェクト2年目の朝読書経験者のうち5名(約83%)は、全員が自らに日本語読書習慣はあると考えていた。Q17への回答からプロジェクト2年目7名のうち6名(約86%)に英語多読学習のついでに図書館で日本語図書を借りた経験(「ついで読書」)が見られることから、二つのグループの構成員はおおむね重なることが予想できる。(表3)が示す通りプロジェクト2014の「ついで読書率」が約58%であったのに比べ、2年継続したグループではその率が格段に上がっていることから、この2年の取り組みの結果、読書する学生が増えたことが察せられる。

日本語読書習慣があるにも関わらず、本プロジェクトに参加した学生のほぼすべてが日本語訳等の読書に移行せず英語のみで読みつづけた。そして、不思議なことに授業内外の読書を英語で続けた一方で、自分たちには自主的な「英語多読学習」の習慣はついていないと回答していた。この一見矛盾するよう見える現象は、二通りに解釈できる。第一の解釈は、単純に彼らは2年間英語で読み続けているのにもかかわらず、それが身につけていないという実感があるというものである。第二の解釈は、すでに日本語で読書習慣のある学生は、英語多読学習という設定を経由して、「英語読書」に向かう過程において、特に英語の授業内で時間を与えられ、実際にはそれ



が英語多読学習としても機能しているのにもかかわらず、それを「学習」として意識せずに「楽しむのために」英語で書かれた図書を読んでいたという解釈である。これは英語多読学習の先駆者であるジュリアン・バンフォード (Julian Bamford) とリチャード・デイ (Richard Day) のまとめた多読学習 10 原則の 6 つ目にあげられた「リーディングの目的は通常『楽しさ』、『情報』、『概略的理解』である」に合致し、多読学習の本来のあるべき姿の一つの形であるといえよう⁽¹¹⁾。筆者は 7 名のうち 1 名でも、後者の解釈に当てはまる学生がいることを望む。

IV プロジェクト参加者の将来的観測

これまでの研究結果は、英語授業における継続的な働きかけがなくなった後に、学生の英語多読学習および読書習慣、ならびにそこから派生した日本語読書習慣を保つことは困難であることを示している。2014 年度にプロジェクトに参加したものの、2 年目は参加しなかった学生 6 名に対して行った調査から、ウェブサイトやキャンペーンなど彼らとプロジェクトをつなぐ試みにも関わらず、彼らのすべてが 2015 年度の時点で前年度に行っていた英語多読学習を辞めてしまっていることからそれは類推される。さらに 2 年間継続してプロジェクトに参加した学生 7 名全員も、Q10 およびインタビューで、まだ「自主的に」英語多読学習を続けているわけではないと回答している。この結果から、2 年間プロジェクトに参加し、「英語多読学習」を続けてきた学生に関しても、教員側からの継続的な呼びかけや、時間の提供がなくなると、少なくとも英語多読学習はやめてしまうことが予想される。残念ながら英語クラスにおける取組の必要がなくなると、英語多読学習に付随して開拓された、英語または、特にプロジェクト 2015 から参加した学生に関しては日本語の読書習慣も一緒に無くなってしまうものと考えられる。

希望があるとすれば、彼らの中に英語授業の時間内で英語多読学習をしていたという意識を持たずに、与えられた枠の中で「英語で読書」を続けていた学生が少しでもおり、彼らがその後も何らかの機会を与えられ、言語を問わず読書との関わりを続けていくことにあるといえよう。ただ、彼らが 3 年次以降本格的に専門教育にシフトするカリキュラムを持つ、実学志向の大学で、資格取得を目指す医療情報学部の学生であることを考えると、その期待を高く持つことはできない。

しかしながら、本研究の結果は、裏返せば管理者をたて、継続的に時間を与え続けられ、少なくともプロジェクトの実施された 2 年間は、その枠の中で、英語で本を手取る学生が増えていくことを示した。永遠に教員が管理し続けるというのは非現実的であるし、それは本研究が最終的に目指した生涯学習とは相いれない考えだ。ただ、少なくとも大学 4 年間は、中学・高校の朝読書で培われた読書習慣を継続する機会を作り出し、読書習慣の

ない学生にはその創出と定着を、そしてすでにその習慣のある学生にはその維持と拡張をうながす時間を語学の授業で提供し、学生の語学力、知識の向上に努めることは、教養教育としては至極有意義なのではないか。

そのうえで、学校等では教員が行う「外部からの働きかけ」を大学卒業後に、社会の中で「誰が」「どのように」行い、彼らを生涯「読み続け」、「学びつづけること」に結び付けていくのかを模索し、そのシステムを構築することが、今後の重要な課題といえよう。

おわりに——敬和学園大学における「多読 to 読書」の可能性と難しさ

北海道情報大学で実施された2年間の「多読 to 読書」プロジェクトは、英語の授業時間内の英語多読学習からスタートし、段階的に図書のパリエーションを英語学習者向けのものから、より幅広い英語ないしは日本語で書かれた書籍へと拡大しようと試みた。特に授業内の英語読書に加えて、2年目にはウェブサイト、キャンペーン等の補助を用いながら、筆者が学生にとってより心地よいと考えていた、日本語の読書に移行させる経路をもって、学生が書籍にふれる時間を継続的に提供することにより、それまでに培われた読書習慣を維持、補強する可能性を探り、その有効性が一部で確認された。

最後に、このプロジェクトのささやかな研究成果を、敬和学園大学の教育実践でどのように生かせるかを考えながら本稿を終えたい。まず、第1に、教員である我々自身は、英語多読学習、並びにその派生形である「多読 to 読書」を成功裏に実践しようとするならば、年度をまたいで長期間にわたり、一定の時間を用意し、学生の管理を行なう覚悟で挑まなければならないであろう。本研究が示した通り、学生の英語読書習慣は教員側が管理をしなくなると、非常に高い確率で急降下する。それを防ぐためには、通常複数の教員で実践される4年間の学習プログラムのなかで、この実践が途切れないように、綿密かつ長期的な打ち合わせが必要となる⁽¹²⁾。

第2に我々は、学生に養わせたい力が英語力なのか、日本語による読書習慣の形成、維持、知識の吸収なのかを問い、「多読 to 読書」の実施対象と実践方法——どのステージにどの段階ですすむのか、またすすまないのか——を決定しなければならない。そのためには、我々が育てようとする学生像を明確化することが必要となる。というのは、本研究が明らかにした通り、1年目に英語による読書習慣がついた学生は、次年度でも英語授業内で時間を提供した場合、日本語での翻訳等の読書には移行せず、そのまま英語で読書続ける傾向にあるからである。この英語による読書習慣を長期間持続できれば、学生の英語力、特に読むスピードや語彙力などは向上するであろうし、長期的には自発的な読書習慣にもつながっていくであろう。当然であるが、英語文化コミュニケーション学科の学生には英語力の向上は望ましい。しかしながら、英語で読書する場合彼らが母国語で読書する

際のスピード、情報の正確さ、量には少なくとも最初の数年は追いつかない可能性が高い。したがって、英語スキルよりもリベラルアーツ教育の一環として、知識や教養の強化を目指したい場合、英語を母語としない学生にとって、英語による読書が最善の方策かどうかは、周到に議論せねばならないであろう。2つの目標を同時に達成したい場合は、スキル系の授業以外の場で、別枠で翻訳や関連図書を読む時間を与えるようなプログラムを組んでもよいのかもしれない。

また、プロジェクト2年目に新規に参加した学生たちを対象とした調査が明らかにした通り、1年目で英語多読学習用図書、その他の英語の図書と日本語の図書を一度に導入し、日本語を読むことを可とした場合、学生は早い段階から日本語訳読書に流れ、英語で読むことを極力避ける。この場合、英語スキルの向上には非常につながりにくい。しかしながら、留学生や日本人であっても異なる言語・文化的背景で成長した学生を除いては、母語で読むため、スピードや情報の正確さや量という点では、英語で読むより得るものが大きくなることが予想される。そのため、英語を主たる第二外国語と設定していない国際文化学科の一部学生や共生社会学科の学生など、専門が英語ではなく、必修で英語を履修しており、高い英語力が求められていない場合などは、こちらの導入方法が適しているケースもあろう。また、いま述べた通り、英語多読学習から母語による読書への移行を考えた場合、日本語が母語ではない学生に差別的なプロジェクトにならないように配慮しなければならないだろう。

ここに挙げた課題を熟慮したうえで、他大学における筆者の実践が、敬和学園大学の学習プログラムの向上につながっていくことを望むが、そのために十分な議論と準備が必要になる。現段階では「多読 to 読書」の敬和学園大学における応用的実践へのハードルは高いと言わざるを得ないが、幅広い教養を身に着けることを目指す、リベラルアーツ・カレッジとして、敬和学園大学でそれを実現する意義は大きい。

本研究は JSPS 科研費 JP24653233 の助成をうけたものである。

註

- (1) 荒木陽子「『多読 to 読書』プロジェクト2014——英語多読学習を介した日本語読書習慣作りに向けて——」『人文社会科学研究所年報』14(2016): 61-73.
- (2) 「多読 to 読書プロジェクト」, 荒木陽子, 2014-2016, <https://arakiproject.jimdo.com/> (accessed 15 Jan. 2018). 悪意のある利用者による改変等を避けるために、フロントページ以降に進むためにはパスワードを設定しているので、閲覧・利用等を希望される方はy-araki@keiwa-c.ac.jpまでご連絡いただきたい。

- (3) ジンドゥはドイツで2009年よりサービスを提供している。日本ではKDDIウェブコミュニケーションズと協業関係にあり、有料サービスも提供している。詳細は、同社のウェブサイト参照されたい。Jimdo, 2018, <https://jp.jimdo.com/> (accessed 15 Jan. 2018).
- (4) 「北海道情報大学図書館」, 北海道情報大学, 2018, <http://www.do-johodai.ac.jp/library/index.php> (accessed 15 Jan. 2018).
- (5) 荒木, 66-67.
- (6) 荒木, 61. 元としたデータについては、以下のインターネット上の情報を参考にした。「朝の読書」, TOHAN, 2015, <http://www.tohan.jp/csr/asadoku/index.html> (accessed 26 Nov. 2015).
- (7) 荒木, 68-69.
- (8) Samuel Beckett, *Waiting for Godot* (Grove, 2011); William Shakespeare, *Hamlet* (Oxford UP, 2008). いずれも戯曲で、それぞれが書かれたのは前者が1940年代末、後者は16-17世紀転換期。ベケット作品については、当初フランス語で書かれている。
- (9) ローリング(J.K. Rowling)はハリー・ポッター・シリーズ、マイケル・クライトン(Michael Crichton)はジュラシック・パーク・シリーズの作者として知られる。Mark Twain, “The Adventures of Tom Sawyer,” *The Complete Adventures of Tom Sawyer and Huckleberry Finn* (Benediction, 2012). 5-275. 初版は1876.
- (10) 荒木, 71-72.
- (11) Julian Bamford and Richard R. Day, Introduction to *Extensive Reading Activities for Teaching Language* (Cambridge UP, 2004), 2.
- (12) 豊田工業高等専門学校をはじめとする高等専門学校群、並びに理系の教育機関から、英語多読学習の成功例が多く報告されている一因は、選択幅の狭い専門教育カリキュラムの中で、特に高等専門学校では、本科5年間、専攻科を含めれば7年間にわたり、英語学習を管理できることにあるのではないだろうか。学内はもちろん、一般や企業からも参加を募る形で、地域レベルで継続的に行われている英語多読学習の取り組みとして、豊田工業高等専門学校のウェブサイトを紹介する。「一般・企業の皆様へ」豊田工業高等専門学校, 2006, http://www.toyota-ct.ac.jp/citizens/tadoku_schedule.html; 「英語多読」豊田工業高等専門学校, 2006, http://www.toyota-ct.ac.jp/intro/education/student_support/tadoku.html (accessed 15 Jan.2018) .